

# 令和4年度 白根源小学校 学校評価（後期）

## 自己評価 考察

### 全体を通して

すべての項目で、肯定の評価が多かった。一学期に引き続き、学校長の考える学校経営グラウンドデザインのもと、全教職員が一丸となって学校活動に取り組んでいると言える。ただし、A評価よりB評価が増えているいくつかの項目については、考察し、より良い改善に向けていきたい。

### 学校教育目標、経営方針・学校運営（1～7）

◎すべての項目において、100%の肯定的な評価であった。

- ・全職員が「学校教育目標や指導重点を意識した教育活動を進めている」と評価する中で、「PDCA サイクルに基づいた改善の意欲」「校務分掌に基づいた学校運営の参画」についても意欲の高さを感じる。この一年間、with コロナの時代を迎え、学校教育の在り方を模索し、児童にとって最善の方向を全職員で探ってきた。先の見えない不安に全職員で向かい、超えてきたといえる。その成果がこの評価につながっていると感じる。
- ・「職員の相互理解・信頼関係」「チーム源の下での指導」についても全職員の評価が高い。職員がそれぞれの分掌に向かいながらも横の連携を常にとり、相互にリレーションを強めながら、一丸となって児童の教育に向かっているといえる。
- ・「危機管理意識の保持」については、折に触れて学校長より指導があったと同時に、職員室でも互いに啓発するような会話が出ることもあり、職員自身が規範意識を高めた結果といえる。また、自然災害・事故などの緊急事態、いじめ等の他、コロナ感染症対策に向けても、職員会議で現状や対応策を話し合い、意識化を図ってきた。今後も規範意識が薄れないように話題として出していくことが必要となる。
- ・「専門性の向上」についても、高い評価がみられる。日々の教育活動は非常に忙しいが、それぞれの職員が自分の専門性を高めたり、教員としての資質を高めたりするための研修に積極的に向かっている。学校を空ける職員の補欠対応も教務主任を中心に適切に行われ、研修の受けやすさを生み出している。

### 学級経営、学習指導（8～11）

○いずれも肯定的な評価が多いが、1学期に比べて若干下がっている。

- ・児童理解については、情報交換やケース会議などが必要な時にすぐ開かれ、共通理解が図られるとともに、個々の児童をより多くの職員の手で見守り、学校全体で支援していこうとする風土がある。それらがより良い学級経営につながっていると考える。ただ、個々の児童の抱える課題は依然として多い。今後も職員相互の連携とリレーションを大切に児童支援を進めていきたい。
- ・学習指導に関しては、市単講師による算数のTT指導や個別の支援体制を仕組むことで、学習面で困難を抱える児童の支援に取り組んでいる。肯定的な評価が多いが、「きめ細かな指導」や「関わりあう授業づくり」についてはB評価が増えている。コロナ感染症対策が続く中で、運動会や学習発表会などの学校行事に向けた取り組みもあり、担任があわただしい中で授業に真摯に向かえない現実も一因と考える。来年度の行事への取り組み方を再考し、担任が学習指導に向き合える精神的・時間的な余裕を生み出すことが必要だと感じる。
- ・家庭学習については、家庭との連携が不可欠である。家庭学習週間を設けるなどして、家庭への協力を呼び掛けてきた。ただ、家庭によっては児童に十分目を向けられない現状もあるので、今後も粘り強く働きかけていく必要がある。

### 児童理解, 生徒指導 (12~14)

○1学期に比べてA評価がぐんと増え、いずれも肯定的な評価が多い。

- ・「児童の規範意識への指導」については、学校の決まりを基に「あいさつ」「くつの整頓」「うがい・手洗いの遂行」など、全職員で確認しながら指導に当たってきた。多くの児童が落ち着いた生活を送っていると感じる。また、「いじめ・不登校・問題行動への対処」についても、担任・教務・養護教諭・特別支援コーディネーター・管理職などが連携し、外部機関を積極的に活用する中で、意欲的に取り組んできた。今後も、担当を中心に組織的なチームとしての動きを進めていくことが大切だと感じる。
- ・本校は特別支援学級の児童だけでなく、家庭生活も含めた個別の課題を持った児童が多く在籍する。日常的に、コーディネーターや特別支援学級担任を中心とした組織体制を組み、支援方法を常に模索し改善を図っている。そのため、職員の意識も高まり、それぞれにできる工夫やできる支援を行っていることが本校の強みであり、評価が高まったポイントといえる。

### 保護者・地域連携 (15)

○100%の肯定的な評価であった。

- ・担任や養護教諭が保護者とこまめに連絡を取り合う姿が日常的に見られ、保護者の学校への信頼感が高まっていると感じる。これからも家庭とのきめ細かな連携を大切にしていきたい。
- ・地域の方の学校への関心は依然として高い。本年度も「にこにこサロン」のお年寄りによる学校の農作業へのお手伝い、愛育会との連携活動、地域の方による児童登校中の見守りなど自主的な協力が見られる。また、本年度から「源小の子どもを見守る会」の組織を再編し新たな取り組みを導入したり、学校応援団による高学年での家庭科学習支援も再開させたりした。今後も地域との結びつきを大切にしたい。
- ・学校からのお便りは充実しており、校長による学校だより、各担任による学年通信、各分掌からの保健・図書・給食だよりなど、その時々合わせた情報提供が家庭との共通理解の一助となっている。

## 児童アンケート 考察

### 全体を通して

1学期に続き、全体的に肯定的な評価が多かった。多くの児童は、項目1で「学校は楽しい」と答えており、D評価の児童はいなかった。大きな成果である。ただ、C評価の児童が少なからずいる現実を受け止め、今後も職員全員で全校児童を見守り、声をかけ、安心感のある学校生活へと支援していききたい。

### 学習・授業について

- ・学校の授業については、A B評価の児童合わせて95%が「分かる」と答えている。ただ、C評価の児童が1学期より若干増え、4.9%いた。どの学年も学習内容は1学期より難しくなっているため、次第に学習理解に困難さを抱える児童もいると思われる。本校では、特に算数の授業において学習支援体制を強化し、TTでの支援を行ってきた。今後も粘り強く支援を続け、「分かる」楽しさを味わわせていきたい。
- ・項目3の「授業中に質問や意見を言う」で、C D評価の児童が39.8%おり、他の項目に比べて評価が低だけでなく、1学期の28.4%と比べてもかなり評価が下がったといえる。本年度よりコロナ感染症対策が緩和され、グループでの学習や少人数での対話の時間が許容されるようになった中でこの厳しい現実を受け入れ、授業や日常の活動において児童が話したくなる課題の設定や発言の機会を多く設けるなどを通して、児童が自信をもって発言できる雰囲気づくりを進めていきたい。
- ・項目5から、家庭での学習状況についてはA B評価が90%であり、全体としては良く取り組んでいると捉えることができる。ただ、1学期に比べてA評価が減っている点から、学習環境づくりの大切さを伝えるとともに家庭への協力を継続的に呼び掛ける必要があるだろう。今後も、家庭と連携する中で児童本人を励まし、家庭学習の充実を目指したい。

### 生活面について

- ・項目6より、1学期に引き続き多くの児童がクラスの友達と仲良く遊ぶことができている。また、項目8から、困ったときに相談できる友達がいると答えている児童がA・B評価合わせると若干増えており、子ども同士の結びつきは良好に深まっているといえる。日常的には子ども同士のトラブルも見られるが、その都度、担任をはじめ職員が迅速に関わり、友達関係を良好に育てていると感じる。
- ・項目7を見ると、C D評価の児童が1学期よりさらに増え50%近くおり、他学年同士で遊ぶ機会が減っていることが分かる。本校は小規模校で児童数が少なく、多学年で組織された登校班で一緒に登校しているが、遊びでの交流が見られない。人と接することを制限せざるを得ないコロナ禍における影響もあり、縦割り活動を主とした児童会活動が実施できなかった影響も多分にあると考えられる。今後はwith コロナの時代を迎える中、感染症対策に気を配りながらもできうる児童会活動や学校行事などを工夫し、児童の縦のつながりをつくりだしていきたい。
- ・教師と子どもの関係については、項目9, 10, 11より、非常に信頼関係が強いことが分かる。日頃の職員の真摯な取り組みのおかげだと自負したい。今後も全職員で情報共有を行い、子ども達を見守り、児童の心の安心と安全を図っていききたい。
- ・勤労奉仕的な活動については、項目12から分かるように100%近い児童が自分の取り組みを評価している。「掃除をしっかりとる」「自分の仕事に責任をもつ」といった良い伝統が根付いていることを感じる。

### 学校外での生活について

- ・あいさつについては、項目13,14共にA B評価が多く、子ども達はよく言えていると捉えている。ただ、普段の様子を見ると、自分から言えていない児童が多いことを感じている。より良い人間関係をつくる第一歩としてあいさつが大切であることを指導し、自覚をもたせていきたい。また家庭

にも習慣化をお願いしたい。

- ・「早寝・早起き・朝ごはん・すっきりうんち」を合言葉に、児童にも家庭にも日々の健康についての意識化を図っている。項目15より、ほとんどの児童が朝ごはんをとってから登校できているが、ごく少数のCD評価をつけた児童については、家庭への指導も含めた個人対応を進める必要がある。

#### 家での生活について

- ・項目16より、児童は学校のことについて保護者とよく話をしている。ただ、CD評価が若干増えていることが気になる。成長と共に親に学校のことを話したがる児童もいるが、思春期を迎える大切な時期だからこそ、児童の言葉に耳を傾け、学校と家庭と共通理解を図れるようにしていきたい。
- ・項目17の「災害が起こったときのことを話しているか」については、ほぼ半々である。大規模地震・河川の水害などが叫ばれる現在、家庭でも日常的にこのような話をしてほしいことを学校からも呼び掛けているが、さらに呼びかけを強化する必要がある。

#### 携帯電話・スマートフォンの使用について

- ・携帯電話やスマートフォンを持っている児童が増えている。ただ、使うときの家庭内のルールについては、「ない」と答えている児童の割合が増えている。機器を通して恐ろしい事件が起きている現代の社会において、保護者がどれだけ危機感をもって子どもたちに向き合っているかが大切なポイントとなるだろう。本校では5年生でスマホ・携帯教室を開き親子で学ぶ機会を持っているが、今後もこのような機会を継続していく必要がある。

## 保護者アンケート 考察

### 全体を通して

すべての項目で肯定的な評価が多かった。保護者の多くは、学校に信頼をよせていることが分かる。少数のC D評価の意見にも耳を傾けて、保護者と足並みのそろった学校運営を行っていききたい。

### 学校教育目標、経営方針・学校運営（1～3）

◎すべての項目において、肯定的な意見が占めた。

- ・「特色ある教育活動」については、コロナ禍でそれまで伝統として続いてきた学校活動の多くを変更・中止せざるを得ない面もあったが、本校にできることを粛々と行ってきた。小笠原流礼法の学習やなのはなのお話会が概ね評価されているが、「他校とあまり変わらない」という意見も少数あった。来年度以降も、子どもにつけさせたい力を念頭に諸活動の内容と取り組み方法を工夫しつつ、「本校だから!」という特色を盛り込んでいくことが必要だと感じる。
- ・授業参観や開放日など保護者が学校での児童の様子を見取る機会や時間は減っており、そのことを残念に思う保護者も数名いた。With コロナの時代に向けて、保護者が学校での児童を見取る時間をどう設けていくかを学校として真摯に探っていく必要があると感じる。ただ、項目3の結果から、お便りを通して学校の様子を知る保護者は多い。校長による学校便り、各担任による学年学級通信、各分掌からの保健・図書・給食便りなど、それぞれに工夫した内容が十分家庭に伝わっていると感じる。

### 学級経営、学習指導（4～7）

○いずれも肯定的な評価が多い。

- ・項目4より、教師の授業への取り組みを評価している。本校の職員編成は経験も得意分野も様々であるが、それぞれの真摯な授業づくりや授業の様子が、子どもの言葉を通して、より良く家庭に伝わっていると感じる。今後も児童の実態にあった授業づくりをするために、ベテラン教師も経験年数の少ない教師も互いに補完しあいながら全体のレベルアップを図っていききたい。
- ・項目5・6については肯定的な評価が多かった。担任の関わりはもちろん、全職員で全校児童・全保護者を支援していこうとする姿勢が、保護者にも評価されていると感じる。課題を抱えた児童については、今後も個別での支援を大切にしていきたい。

### 児童のこと（8～13）

○肯定的な評価が多い中でもB評価が多く、各家庭での子ども達への関わり方やしつけ面での違いが感じられる。

- ・項目8,9,10 共に肯定的な評価であり、ほとんどの保護者が学校での子ども達の様子に安心感をもって送り出してくれていることが分かる。ただ、少数の不安を抱えた保護者については、個別対応を進めると同時に、その都度真摯に対応していきたい。
- ・項目11,12,13については、その子の個性もあるだろうし、家庭での保護者の関り方の影響も大きいと感じる。家庭学習やあいさつについては、家庭でルールを決めたり、しつけとして行ったり、保護者から働きかけたりといった部分での差が大きいので、各家庭にその大切さを問いかけていく必要があるだろう。

### 保護者自身のこと（14～20）

○B評価を中心とした肯定的な意見が多い。CD評価もいくらか見られ、各家庭おける保護者自身の子どもへの関りに差があることを感じる。

- ・項目16より、高学年になるにしたがって家庭学習への関わりが薄くなる傾向がある。保護者自身の忙しさなどもあると思うが、学力向上のために家庭学習が大切なことをこれまでも家庭学習週間の取組などを通じて知らせている。今後も続けていく必要がある。
- ・項目18については今日的課題である。アンケート結果では比較的A B評価が多く、保護者と児童が

きちんとルールを決めて取り組んでいることが分かる。ただ、10%近くがCD評価であること、ゲームについては児童から直接話を聞くと長時間遊んでいる児童が少なくないことなどの現実から、今後も保護者自身に危機感をもって子ども達に向き合ってもらえるよう強く声をかけていることが必要である。

- ・項目20については、CD評価の保護者が若干多かった。記述内容を見ると、とくに高学年の保護者から「児童本人に解決する力をつけてほしいから」といった理由があった。本校には保護者の悩みをいつでも受け入れるという姿勢があるが、今後もささいなことでも家庭と学校とで共通理解が図れるよう相談しやすい土壌作りを継続することが大切だと感じる。また、相談があったときには誠実に対応していきたい。